

視覚障害者における「柔道」についての一考察

鳴門教育大学大学院 修士課程 2年

生活・健康系（保健体育）コース

小林 弘樹

【緒言】

柔道は、1822年に嘉納治五郎が、天真心楊流と起倒流の二つの柔術の良い部分を合わせ、講道館を設立したのが柔道の始まりである。

1952年には、国際柔道連盟が発足し、世界各国に普及発展したことにより、1964年の東京オリンピックで正式種目に加えられた。

オリンピックや世界大会での柔道はテレビ放映もされ、注目されているが、障害者の柔道はパラリンピック等の世界大会はあるものの、一般の人々にはあまり認知されていない。

視覚の重要性は、普段生活する時、健常者にはあまり意識されていないが、行動をおこなう時の情報の約8割～9割は視覚からの情報である。このことから視覚の情報がスポーツを行う時にも重要であることは明白である。視覚障害者の人は、視覚からの情報がほぼ皆無であるのに、なぜ複雑な柔道という競技ができるのかという疑問がある。柔道の受身や技を覚えるのに我々は視覚で動きをとらえ、耳で説明を聞いて実際にその動作を行う。

一般の人々には、視覚障害者をはじめ障害を持っている人の柔道は、健常者とは大きな違いがあると思われる。しかし、実際には視覚障害者の柔道と健常者の柔道がどのように違っているかとの詳細なデータは明らかにされていない。

よって本研究は、視覚障害者柔道に関する詳細なデータを収集することにより、柔道の新し

い魅力を発見し、障害者柔道と健常者柔道を合わせた柔道全体のさらなる発展につながる知見を得ることを目的とする。

【結果及び考察】

1 視覚障害とは

視覚障害は、視力と視野のどちらかに障害があった場合に視覚障害とよばれている。法的・社会的には「視覚障害」が適切な名称となっている。また、目の不自由でない者を晴眼者（正眼者）と言われている

2 視覚障害者・児の人数

・視覚障害者 310000人

・視覚障害児 4900人

視覚障害者・児原因

- ・疾患によるもの 19.7%（障害児 12.2%）
- ・事故によるもの 8.1%（障害児 0%）
- ・加齢によりもの 2.0%（障害児 0%）
- ・出生時の損傷によりもの（障害児 12.2%）
- ・不明・不祥事等その他 65.7%（障害児 76.6%）

3 視覚障害者柔道と健常者柔道の特徴

視覚障害者柔道と健常者柔道の特徴は、両者とも組み手にあると言える。健常者の場合は、組み手争いがあり、なかなか組まない。また、片手の状態でも技をかけることがある。視覚障害者の場合は、組んだ状態から開始するために、開始直後から技をかけることができ、そのまま投げることもある。特徴の1つとして背負投げがよく使われている。

4 視覚障害者柔道大会現状

下の表は、第2回と第3回の全国視覚障害者学生大会に参加した人数や年齢を階級別に区別したものである。

階級	第2回大会			第3回大会				
	参加人数	年齢幅	平均年齢	参加人数	年齢幅	平均年齢	初段数	
男子	60kg級	10	14~43	21.6	7	15~34	19.3	2
	66kg級	6	14~40	24	4	20~39	33	2
	73kg級	3	18~25	22	8	15~41	24.4	3
	81-90kg級	5	17~22	18.8	4	18~23	20	2
女子混合	3	18~20	19	4	13~21	18.3	2	

各大会の参加人数は27名と変化がみられなかったが、各階級で見ると変化がみられ参加者の変化があらわれていることがわかる。

5 視覚障害者柔道と健常者柔道の比較

下の表は、視覚障害者柔道（第2回・第3回全国視覚障害者学生大会）と健常者柔道（第4回徳島県秋季柔道大会）の試合の平均を表にしたものである。視覚障害者と健常者には、特に組み時間に大きな違いがでた。

	試合時間 (秒)	流し時間 (秒)	組み時間 (秒)	組んで無い 時間(秒)	寝技時間 (秒)	待ち時間 (秒)	待て (回数)	「待て」から再 開まで(秒)
視覚障害者 平均	100.2	173.4	62.9	0	32.6	73.2	2.2	20.7
健常者平均	99.5	141.8	32.6	43.7	22.8	42.2	3.4	9.2

下の表からもわかるように、一本勝ち率や立ち技率などに違いがみられた。技の回数も足技は違いが見られなかったが、まわし技・かつぎ技・捨て身技には違いが見られた。

	一本勝ち率	立ち技率	足技平均 (回数)	まわし技平 均(回数)	かつぎ技 平均(回)	捨て身技平 均(回数)
視覚障害者 平均	94%	64%	5.5	1.1	2.0	0.4
健常者平均	65%	52%	5.4	3.8	1.0	0.2

6 インタビュー結果

インタビューを指導者と選手に行った結

果は、練習内容は打ち込みが中心の練習であった。指導者と選手が感じている視覚障害者柔道の問題点は、指導者が少なく練習場所や練習時間も少ないことである。また、視覚支援学校での柔道授業がなくなった為に、柔道を始めるきっかけも少なくなっているのが現状である。しかし、視覚障害者柔道と健常者柔道の違いを指導者と選手に聞いてみたところ、健常者とあまり違いは無いと意識している。

【結論】

視覚障害者柔道と健常者柔道では、各所で違いが現れたが、特に違いが現れたが組み時間で、健常者と比べて視覚障害者は約2倍時間がかかっていることがわかった。組み時間が約2倍になるということは、疲労度の約2倍になることが予測できる。これにより、健常者の練習でも組んでから始めることにより、正しい姿勢で組んだ柔道ができることと、相手と組み合った状態でも投げることが出来る技術が身に付くことが予測され、「一本」をとれる柔道が身につけることが可能だと考えられる。

一般の学校体育で、柔道を行う場合にも組んでいる状態から乱取りを行うことにより、運動量の確保ができることと、組んでいる時に引き手は離さないことを意識づけすることにより安全の確保もできると考えられる。

【今後の課題】

本研究で視覚障害者柔道の特徴が理解できたが、視覚障害者柔道の競技人口を増やす為に、視覚障害者支援学校での体育授業を行うことが必要と考える。その為に、体育授業で柔道を行う為の指導案作りである。健常者の体育授業と違い、障害の程度別に合わせて授業を作成しなければならない。